

# 寅さん歩 その14

## 東京に こんなところ-16



平野 武宏

首都東京は徳川幕府の江戸から明治維新へ、そして関東大震災・太平洋戦争の被災で壊滅から復興、1964年（昭和39年）の東京オリンピックによる街並み・交通網の再整備と時代と共にその姿を変えています。そして2020年の東京オリンピック・パラリンピック開催に向けて、更に近代的な姿に生まれ変わろうとしています。

「寅さん歩」で東京を歩き回っている寅次郎は「東京にこんなところもあるのだ！」と思わせる場所に出会い、感動しています。新シリーズとして取り上げ、紹介します。

都民暦約5年の「寅次郎基準」で選んでおりますので、ご容赦ください。

### ～ 柴又駅前に寅さんの妹「さくら像」が登場 ～

映画「男はつらいよ」の「ふうてんの寅」こと「車 寅次郎」のふるさとは「葛飾柴又」です。

帝釈天で産湯をつかい、参道にある「だんご屋」が実家（寅次郎の亡き父の弟でだんご屋を引き継いだ「おいちゃん」の家）です。写真下左は産湯をつかったと思われる帝釈天境内の「御神水」、右は映画でモデルとなった「だんご屋」です。



車 寅次郎を演じた「渥美清さん」は第48作を撮り終えて、平成8年（1996年）8月4日 帰らぬ旅に出てしまいました。

その3年後の平成11年(1999年)8月に柴又駅前に「寅さん像」が設置されました。長い間、「寅さん」がひとりぼっちで、かわいそうだとの声もあり、平成29年(2017年)3月25日に妹「さくら像」が設置されました。

寅さんが失意の旅に出る時に、駅まで見送りに来る妹「さくら」の姿です。寂しさに耐えながら見つめ合う二人、なぜかその間の距離が少し遠い気もしますが・・・



## [こぼれ話] 寅さん語録

映画「男はつらいよ」の寅さんは旅先でマドンナと出会い、恋をし、そして破局、柴又に戻ってのひと時の家族だんらん、「おいちゃん」や裏の印刷会社の「たこ社長」と喧嘩して、又、旅に出る、柴又駅ホームでの妹「さくら」との別れと毎度、同じパターンですが、なぜか観る者を飽きさせません。

全48作のビデオを持って、「寅さんの生き方」や「その言葉」を学んでいる平野 寅次郎、教えられることが多いです。

マドンナとはいつも最後は失恋で終わる（実は身を引いているのかも）「寅さん」ですが、映画の中で恋の指南の熱弁をふるう場面が数多くあり、「なるほどな、真剣に恋に立ち向かった寅さんの言葉だ」と感心しています。

- ・恋とは「私のために死んでくれない」って言われたら、「ありがとう」とすぐに死ぬ。それが恋ってもんじゃないだろうか。  
～第10作「男はつらいよ 寅次郎夢枕」より～
- ・恋とは「胸の中の炎の中に恋という字を放り込み、めらめらと燃えるもの」  
～第43作「男はつらいよ 寅次郎の休日」より～
- ・愛とは「いい女だなあ、この女を俺は大事にしてえ、そう思うだろう、それが愛ってもんじゃないかい」  
～第36作「男はつらいよ 柴又より愛をこめて」より～
- ・「愛しているよ」とその女の前で言えなくちゃ、男は惚れていることにはならないのでございます。  
～第38作「男はつらいよ 知床慕情」より～
- ・「キューピットは2本の矢を持ち、一本目は恋の成就に使い、二本目を放つと恋の破局となる」  
～第30作「男はつらいよ 花も嵐も寅次郎」より～
- ・「女房とは亭主が帰ったら、風呂が先か、酒が先か、面を見てスーっとわかるようじゃなきゃ、だめだよ」  
～第46作「男はつらいよ 寅次郎の縁談」より～

数多い、「寅さん語録」の中で平野 寅次郎の一番のお気に入り  
最終作で柴又に来たマドンナの「リリー」が奄美大島まで帰る場  
面での寅さんの一言です。

- ・「男が女を送るとするのは、その女の家の玄関まで送るもんだ」  
～第48作「男はつらいよ 寅次郎 紅の花」より～

次回は 江戸・東京の祭-58（江戸らしい祭-24）です。

平野 寅次郎 拝